

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成22年度:162.

消化器がん終末期患者における看護師の思い～介入における看護師の  
困惑感と達成感の要因～

工藤紘子

# 消化器がん終末期患者における看護師の思い ～介入における看護師の困難感と達成感の要因～

6階東ナースステーション 工藤 紘子

## 【目的】

進行消化器がん患者の終末期への関りについて、一般病棟看護師の思いを明らかにすることで、達成感と困難感の要因を見だし、意図的介入の示唆を得る。

## 【方法】

終末期患者に関ったA大学病院の卒後2年目以上の看護師を対象に、半構成的面接法によるインタビューを実施した。面接内容は承諾を得て録音し、逐語録を作成し質的データとし、得られたデータをコード化・カテゴリー化し分類した。面接内容は、①印象に残る終末期患者②心に残る体験③よい最期と思える体験④看護実践や考え方・思いの変化⑤看護実践で気をつけていることとその理由とした。対象者には研究の趣旨を説明し、拒否する権利があること、面接内容は秘密厳守すること、個人が特定できないように処理し、研究結果は本研究以外には使用しないことを文書で約束した。

## 【結果・考察】

対象者は25～28歳の女性4名で、臨床経験は2～5年、部署経験年数も同様であった。がん看護に関する研修の受講者と、終末期患者の担当看護師の経験がある看護師は共に3名だった。面接所要時間の平均時間は70分だった。1)《担当看護師としての思い》では、足が運ばなかったという後悔や、人となりを知りたい、自分が看取りたいという終末期に主体的に関りたい＜担当看護師としての責務＞があった。そのため＜看護師役割の遂行＞として、担当看護師として認識された言動を実感す

ることで、達成感へつながっていると思われた。一方でその責務のために、関係性の構築を重要視している＜関係性へのこだわり＞があり、＜終末期患者への思い＞となっていた。さらに＜終末期看護への限界感＞を感じることで、困難感となっていると考えられた。2)《看護師の役割意識からのジレンマ》では、経験と看護介入の＜何もできない辛さ＞があった。一般病棟での介入の難しさとして、家族へ病状や経過をどこまで話していいかわからないという＜業務と終末期看護の間で揺れる思い＞や＜オブラートに包んで答える難しさ＞があった。そして、終末期に対する本人・家族の思いを、手術時から確認する難しさがあり、関りの時間が不足することで＜終末期への思いの確認＞が困難感へととなっていた。3)《理想像への気づきと変化》では、カンファレンスで気持ちを共有することで、精神的な安寧を得られ＜終末期看護への思い・行動の変化＞につながっていた。研修参加や研究経験から本人が死期を悟り準備ができるような最期を理想とし、＜家族がそばにいる看取り＞＜患者の自己決定の支援＞を重要視していた。

## 【結語】

終末期患者における看護師の思いの構成要素は、《担当看護師としての思い》《看護師の役割意識からのジレンマ》《理想像への気づきと変化》の3カテゴリーであった。